

鮎の友釣り

黒岩 常 祥

立教大学理学研究科極限生命情報研究センター
センター長 特任教授



これまでの巻頭言はハード面に關する記載が多いので、本稿では読者の方に少しリラックスしてもらうために、私の趣味についてお話したい。釣りは三歳の頃、度々父親に外堀に連れて行って貰って以来、今日まで続いている。研究者になる前も、なってからも、考えてみると、移動する時の条件は大きさに言えば、近隣に良い釣り場があるかどうかだった。

小学校から中学生までは、外堀と東京湾で、波間に漂う微かな浮きの動きで「目敏さ」を鍛えた。高校生になると柔道部を創部し、身体を鍛えるとか言って皆と三浦半島から江ノ島、さらに伊豆の海へ。

このようにして青年期は健康的な生活を送っているように見えたが、柔道と遊びが過ぎて結核に罹患し、長い療養生活を送ることとなった。完全に回復しないまま大学に入り釣り部を創部した。日本学生釣連合会に入り、茅ヶ崎の投げ釣り大会では選手宣誓もした。こうした適度な運動で完全に健康を取り戻し、今度は大菩薩峠の渓谷、群馬片品川、南アルプス大井川源流などへ、かなりハードな溪流釣りに出掛けた。ある時、初心者2人を連れて慣れたはずの道なき道の断崖を降りたが、溪流に下る途中で暗くなり迷ってしまった。仕方なく3人で身体を大木に繋ぎ一晩明かした。翌朝、朝靄から見えてくる居場所は、ぞっとするような断崖の真上だった。

一時、将来は魚類学者になろうかと思ったこともあったが、子供の頃の遊びで外堀の水を顕微鏡で覗いている時、思いがけない形の微生物を見つけ出した感動が忘れられず、生涯、顕微鏡を使って生物を観察し続けることができる細胞学者になりたいと思った。特に細胞分裂の仕組みに興味を持った。この頃、餌釣りから、わが国独自の「鮎の友釣り」に変わった。鮎は河口付近で孵化し、5-6月頃に500匹単位で、浅瀬の小石に付着した珪藻類や小さな虫を食(は)みながら遡上し、6月頃から流れのある石についた新鮮な珪藻類のみを活発に食み始める。2-3m四方が1匹の縄張りで、そこに他の鮎が入ると、背びれを立てて猛然と襲い追い払う。この闘争を橋の上から見ていると飽きない。友釣りは鮎のこの習性を利用したものだ。前日は1本ずつ針先を、爪に掛けてもずれ落ちないまで、特殊な石で磨きあげ3本を錨形に結わえる。数10本の仕掛けを作るので徹夜になることもしばしばである。現地では、まず川辺の罔(生き鮎)店に行き、元気の良い鮎を2、3匹買う。罔を川に入れ、9-10mの長い竿の先に仕掛けを結わき、最後に小さな鼻輪を鮎の鼻に通す。その先に

前日砥いだ針を繋ぐ。現場の急流では、まず、水中の石を見て多くの矢形の食み後を探す。鮎は口を開いて横向きに珪藻類を食むので、石の表面には必ず羽のような痕が残る。この幅から野鮎のサイズが分かる。遠くから罔を操作しポイントに流し込む。縄張りに罔が入れれば野生鮎がぶつかってきて引っかかる。かかると2匹が強烈な引きで急流を下るので竿先は半月にしなる。タモ網に2匹を取り込むまで不思議な興奮状態となる。手早く罔鮎の鼻輪を外し、元気な野鮎と交換し、次の縄張りへと放つ。罔鮎が元気なほど、縄張り争いが激しいので次々に釣果が上がる。しかし買った罔が弱かったり、釣れないと罔を引っ張りまわすので、罔は疲れ、へたり終日釣れないこともある。

釣りにも革命が起きた。1つは魚に似せたスプーンを引く「ルアー」釣りの流行であり、他方は私が長年経験を積んだはずの鮎の友釣りであった。鮎は急流に棲むため、糸が切れないように髪の毛より少し太めを使い、鮎が流され浮かないように錘をつけ、掛がわかるように糸を張っていた。教官になってから間もなくのこと、いつものように急流に入り、大きな錘をつけ罔鮎を泳がせていたが、その日は夕方になっても釣れない。すると、若者がやって来て、私の近くに罔鮎を入れた途端に次から次に釣りあげる。よく観ると、仕掛けの糸がほとんど見えないのである。しかも糸は弛んでいる。若者の釣り方は「泳がせ釣」というものであった。釣り人の意志に従わせるように鮎の流れのポイントに引き誘導するのではなく、鮎が自然に泳ぐようにしてやる。このため糸は髪の毛より細いワイヤーであった。こうすると鮎は自然に急流の野鮎がいる縄張りへと泳ぎ入り、鮎はアタックするのである。

この頃から少し学生への指導法も変わったらしい。学生の自由な発想と闊達さを重視し、いろいろと細かく指導するのを止めたようだ。学生達が教員となり、自分達は“鮎”だったのでと言っているのを、ある新聞記事で読んだ。彼らが最近Nature誌に投稿した論文の中で、新たに発見した遺伝子に「ルアー」と命名し、表紙にルアーを追う魚を模して“N”と描いたと言う。ユーモアと温かさが若い世代に伝わったと感じて嬉しく思っている。生命科学は、生命の全設計図であるゲノム情報が研究基盤となり、第二の革命期ともいえるゲノム・マス科学時代に入った。自分の興味ある生物現象を明確にし、生物の生き様を十分に観察した上で、生命を構築する数万足らずの全遺伝子を理解し、これらから作られるタンパク質が作り上げる構造・形態を顕微鏡観察する方法に変わっている。そしてハード面における顕微鏡技術の進歩だけでなく、異分野の研究者がお互いに信頼し、尊重し、助けあって、構造を外から見ると共に、その中からも見る時代へと急速に変革している。こうした時代になって改めて、仲間を大切に作る気持ちを養ってくれた趣味のありがたさを感じている。

黒岩常祥 (Tsuneyoshi Kuroiwa)

1971年東京大学大学院理学研究科博士課程修了後、同年4月東京都立アイトープ総合研究所研究員、1973年から1977年岡山大学理学部助教授、1977年から1987年基礎生物学研究所助教授、教授(培養育成施設長兼任)、1987年から2002年東京大学理学部・大学院理学系研究科教授(この間、付属日光・小石川植物園園長、将来計画及び企画委員会委員長、総長補佐、評議員兼任)、2003年から2007年立教大学理学部教授、2007年から現在、立教大学極限生命情報研究センターセンター長、理学研究科特任教授。